

第381回研究報告会（2025年10月31日）

「アウシュビッツ・ビルケナウ（国立アウシュビッツ・ビルケナウ博物館）見学報告」

堀内 みどり

本報告は、8月にポーランドのクラクフにあるヤギエウォ大学（Jagiellonian Universit）で開催された第23回国際宗教史学会（IAHR）世界大会に出席したおり、アウシュヴィツ博物館を見学したことについてのものである。

日本から英語ガイドのツアーを予約し、当日は、手配された旅行会社の車での移動。約2時間弱。車内には同じ見学ツアー参加者が10人余、現地でさらに同数程度の人が加わって、博物館認定のガイド（英語のほかに日本語やドイツ語など多数の言語に対応）に伴われて、グループごとの移動となる。パスポートなどで身分確認の後に入場。犠牲者の名前を読み上げる音声が聞こえてくる通路を通って収容所博物館の見学となった。

アウシュヴィツ強制収容所は、第1強制収容所（基幹収容所・アウシュビッツ）、第2強制収容所（ビルケナウ）、第3強制収容所（モノヴィツ）で構成されていた。博物館は第1および第2強制収容所の2箇所から成っている。写真で見たことのある犠牲者たちの持ち物やガス室で使用されたチクロンBの空き缶の数の多さに圧倒され、残されていたガス室や絞首台に思考が停止した。アウシュヴィツに向かうことの意義とそれを伝えていくことの重要性を改めて実感した見学となった。

報告では、案内された収容所の様子をガイドの解説を中心紹介した。

日本スピリチュアルケア学会で基調講演

（2025年11月8日・9日）

金子 昭

11月8日・9日の2日間、天理大学を会場に日本スピリチュアルケア学会第18回学術大会（実行委員長・山本佳世子人文学部准教授）が開催され、300人を超える参加者があった。同学会は、2007年に創設された新しい学会で、大学の研究者だけではなく、宗教者、医療従事者、社会福祉関係者なども会員となり、さまざまなスピリチュアルペインに対してどのようなケアが可能か、それぞれの立場で研鑽を積んでいる。2012年には民間資格「スピリチュアルケア師」の資格認定制度を開始し、2020年には一般社団法人格を取得して現在に至っている（理事長は島薗進東京大学名誉教授）。

今回の第18回学術大会のテーマは「人との関わりの中に現れるスピリチュアリティ」で、1日目はこのテーマに基づいて一般公開の講演及びシンポジウムが開かれた。基調講演は、私が「いのち・縁・スピリチュアリティ—天理教人間学の視座から—」と題して行い、「元の理」をベースにして人間相互のたすけあいの中に現れるスピリチュアリティについ

て話をした。引き続いて開催校主催のシンポジウム「人との関わりの中に現れるスピリチュアリティ—刑務所、地域、学校の現場から—」が行われ、宗教者3名がそれぞれ宗教教説、地域活動、スクールカウンセリングについて発題した。天理教からは中臺眞治 天理教畑沢分教会長が「一れつきようだい。その中に現れるスピリチュアルケア」と題して民間シェルター、補導委託、自立準備ホーム、子ども食堂など、教会での活動報告を行った。

2日目は午前が2つのシンポジウム、午後が6つの部会に分かれて2つのパネルと18の一般発表が行われた。シンポジウムは「臓器移植とスピリチュアルケア」と「認知症を生きる人へのスピリチュアルケア」とであり、後者では種村理太郎人文学部准教授が「認知症高齢者のスピリチュアルペインを探索するためのアセスメントシートの開発」と題して発題した。またパネルの1つは「たましいのケアを考える—天理の風土の中で—」で、これはスピリチュアルケアにも重なる天理教のおたすけに関わるパネルとなった。平葉子元天理よろづ相談所病院看護部長が「天理よろづ相談所の理念と病院における実践」、福田常男同病院事情部教師が「天理よろづ相談所病院事情部の活動からスピリチュアルケアを考える」、巽信行 天理教修心分教会長が「認知症（を学ぶ）カフェ活動の中でスピリチュアルケアは可能か—ある天理教教会での試みから—」と題して、それぞれ発表を行った。司会は種村理太郎准教授、コメンテータは安井幹直 天理教一広分教会長がそれぞれ務めた。

第382回研究報告会（2025年11月27日）

「わたしの歴史地理研究と留学生教育」

長谷川 優悟（天理大学国際学部講師）

本発表は、私が取り組んできた研究活動と博物館学芸員としてのライフワークをふりかえり、本学日本学科教員として留学生教育にこれがどのように還元できるのかについてである。私が歴史地理学、民俗地理学から取り組む研究は、概ね次のように整理できる。（1）近世・近代の地理メディアを分析対象とした場所認識や系譜、場所イメージの生産実践に関する研究。（2）古地図や絵画資料などの視覚資料に対する東アジア世界共通の分析方法や概念の探求。（3）地域に残る伝説・伝承に対する地域誌としての現在的評価と活用をめぐる研究。（4）過去の視聴覚資料の継承と活用のための研究。（5）地域祭礼や民俗芸能などの地域文化の継承と民俗誌に関する研究などである。これらは、本学科が取り組む文化遺産やナラロジー研究と関わり、留学生の出身国における文化的事例とも類似点をもつ。概論／特論科目では、進め方に注意を払えば講義コンテンツの核となり、実習科目では地域文化を理解するための知的基盤となり、私が関わってきた人的ネットワークも多面的な活用が期待できる。